

# とこなめ陶の森 資料館

## 展示リニューアル基本構想



平成 30 年 5 月

常滑市

# 目次

	ページ
第1章 はじめに	1
第2章 現状の課題と展示リニューアルの意義	1
第3章 とこなめ陶の森コンセプト（基本理念）及び活動方針	5
第4章 展示リニューアルコンセプト	6
第5章 展示リニューアル計画	7
第6章 事業費の概算	9
第7章 スケジュール	9
第8章 運営体制	10
第9章 評価方法	10
参考資料	
1 とこなめ陶の森資料館施設概要	11
2 とこなめ陶の森展示リニューアル検討会委員名簿	11
3 とこなめ陶の森設立時の施設の定義他	12
4 とこなめ陶の森資料館 展示リニューアルエリア	13
5 とこなめ陶の森資料館 展示リニューアルスケジュール	14

## 第1章 はじめに

とこなめ陶の森資料館（旧：常滑市民俗資料館）は、昭和 56（1981）年度に「地域と密接に関連し市民が積極的に利用する“開かれた施設”であるために」と称し、常設展示として国指定重要有形民俗文化財である「常滑の陶器の生産用具及び製品」1,655 点の内約 300 点を中心に展示し開館しました。以来、窯業民俗資料を中心とした市内の文化財を守り、活用するための「文化財センター」、博物館としての機能を持つ「社会教育施設」、学校教育における「郷土学習の場」などを目的に運営してきました。

平成 24（2012）年度からは、“常滑焼の振興と伝承”及び“やきもの文化の創造と発信”を一体的に実施することを目的に、民俗資料館、陶芸研究所及び研修工房の 3 施設を統合した複合施設として「とこなめ陶の森」の名称で再スタートしました。

しかしながら、名称を改めたのみで各施設の特徴を生かした具体的な活動方針や施設の役割、課題などの議論がされていませんでした。また資料館は、開館以後一度も展示のリニューアルをしてこなかったことから、時代のニーズに合わないなど常滑焼の魅力が来館者に伝わりづらいことや安全対策を含めた施設・設備の老朽化も大きな課題となっています。

そこで、「常滑市陶業陶芸振興事業基金を活用した計画（平成 28（2016）年度～平成 32（2020）年度）」<sup>※1</sup>の中で「とこなめ陶の森の充実」の実現を目的に「展示リニューアル」及び「耐震補強及び施設改修」の検討・実施を進めることを定め、平成 28（2016）年度から学識経験者を含めた「とこなめ陶の森展示リニューアル検討会」（【参考資料 2】参照（11 ページ））で議論してきました。

本構想は、資料館の現況の課題を踏まえ、「とこなめ陶の森」の基本理念に立ち戻り、本施設の根幹をなす展示と施設・設備を含めた展示リニューアルの基本構想を示すものです。

※1 平成 28（2016）年 3 月に策定した陶業陶芸の振興及び後継者の育成を図るため、目標と目標を達成するためのスケジュールや実施体制の確保及び推進する内容など記載した計画

## 第2章 現状の課題と展示リニューアルの意義

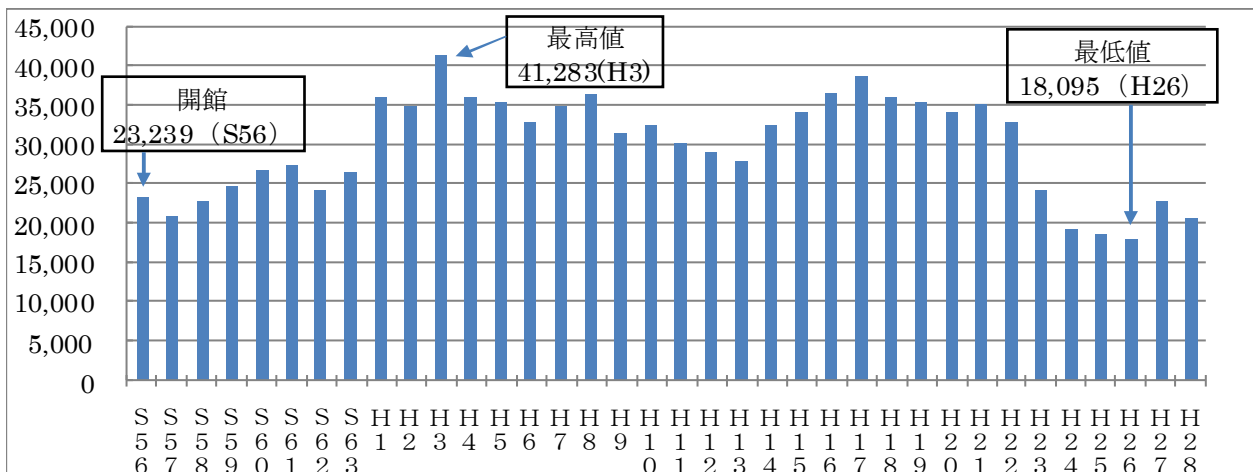
### 【来館者の状況】

資料館の来館者数は、昭和 56（1981）年開館以後図 1（資料館来館者数の推移）で示すとおり、増減はあるものの微増し、平成に入り約 30,000 人/年で推移していました。平成 17（2005）年 2 月「中部国際空港セントレア」開港以後、平成 18（2006）年 10 月「INAX ライブミュージアム」グランドオープン、近年では「大型ショッピングセンター」などのオープンで市内には多くの来訪者があるものの、資料館の来館者数は、直近の過去 5 年（平成 24（2012）年度～平成 28（2016）年度）で約 20,000 人/年まで減少しています。

また図 2（資料館来館者における市内・市外別の大人・子どもの比率）で示すとおり、市内来館者の比率は平均 21%と少なく、特に市内子どもの来館者に注目すると平均 7%と顕著に低い状況にあります。

図1 資料館来館者数の推移

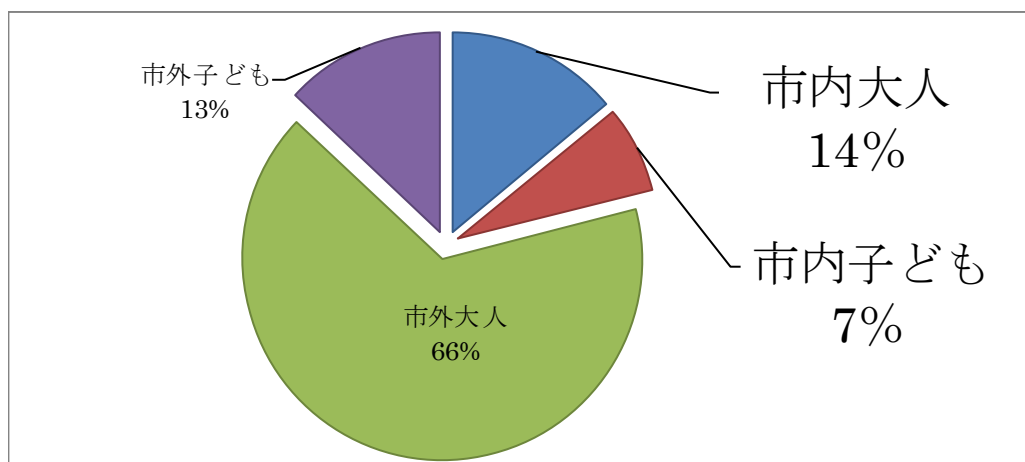
単位：人



※来館者数 平成 29 (2017) 年度 22,333 人

※来館者数のカウントは、資料館玄関入口設置の自動計測器による数値

図2 資料館来館者における市内・市外別の大人・子どもの比率 (直近5年間の平均値)



※直近5年間 (平成 24 (2012) 年度～平成 28 (2016) 年度) の比率の平均値

※来館者数の内訳は、資料館玄関にある任意記入の来館資料を基に算出

**【現状の課題】**

**(1) とこなめ陶の森に関する課題**

- ①とこなめ陶の森の役割や目的が曖昧
- ②資料館と陶芸研究所・研修工房の展示内容や機能などの役割分担が曖昧
- ③市全体で考えた場合のとこなめ陶の森の役割が曖昧

**(2) 展示に関する課題**

- ①展示手法が開館当時から約 40 年間ほとんど変わらず、時代のニーズに合っていない
- ②子どもの利用も見据え、展示物や展示内容についての新たな発見や気づきにつながる解説が必要

- ③市民や訪問者（研究者や観光客など）が、来館したくなる展示手法が必要
- ④何度も来館したくなる展示環境が必要
- ⑤資料館だけでは伝えられることに限界があるため、周辺施設（INAX ライブミュージアム、やきもの散歩道など）と連動した仕掛けが必要

### 資料館展示状況



甕（平安末期から江戸まで）



中世の窯・壺など



国指定重要有形民俗文化財  
「常滑の陶器の生産用具及び製品」



テラコッタタイル・火鉢など

### （3）施設・設備に関する課題

- ①施設の老朽化に伴う改修（耐震補強、外装タイル貼直など）が必要
- ②設備の老朽化に伴う改修（電気設備、空調設備など）が必要
- ③国指定重要有形民俗文化財の展示・保存に配慮した設備が必要
- ④バリアフリーやユニバーサル対応の施設整備が必要
- ⑤周辺環境に合致し、居心地の良いランドスケープ（景観）の整備が必要
- ⑥収蔵スペースの確保が必要

## 資料館施設・設備状況



大地震時にC B（コンクリートブロック）壁  
崩落の危険有



空調設備の老朽化

### 【展示リニューアルの意義】

常滑市の独自性である常滑焼について、資料館が知る・学ぶ場となり、  
後世に常滑焼の技術や文化を継承する“キッカケ”となるために

- (1) 資料館の来館者数は、直近の過去5年（平成24（2012）年度～平成28（2016）年度）で約20,000人/年まで減少し、その内訳では市内来館者の比率が平均21%と少なく、特に市内子どもの来館者に注目すると平均7%と顕著に低い状況にあります。
- (2) しかしながら、常滑焼は常滑市の独自性を保つ大切な財産であり、その財産を後世に継承していくことは市の役割であると考えます。
- (3) 「とこなめ陶の森」は、資料収集・保管と研究、展示などのアーカイブ機能を持つ「資料館」で常滑焼を「知る」ことができ、人材育成などのクリエイション機能を持つ「陶芸研究所・研修工房」で常滑焼を「つくる」ことができ、「知る」・「つくる」の両方から常滑焼の技術や文化を「学ぶ」ことができる施設です。
- (4) その中でも、資料館の機能である常滑焼を「知る」ことは、常滑焼を学ぶ“キッカケ”となり、常滑焼の技術や文化を後世に伝える重要な役割を担っています。
- (5) また、文化やモノの考え方が大きく変わる中、常滑焼を後世に伝えていくには、市民と共に常滑焼の価値や魅力を再確認し、素晴らしさや誇りを共有していくことが必要であり、そのことも資料館の重要な役割です。
- (6) それらの役割を果たすためにも、市全体を俯瞰したうえで、とこなめ陶の森の役割や目的を明確にし、上記の課題を踏まえながら資料館の展示リニューアルを進めます。

## 第3章 とこなめ陶の森コンセプト（基本理念）及び活動方針

前章では、【現状の課題】と【展示リニューアルの意義】を整理し、とこなめ陶の森が今後に行っていくべき役割や目的が明確でないことが問題であると明らかになりました。

そこで、とこなめ陶の森全体のコンセプト（基本理念）を定めたうえで、資料館と陶芸研究所・研修工房の役割分担を行うためにも、各施設の活動方針を本章で決めました。

### 【とこなめ陶の森コンセプト（基本理念）】

「常滑焼の魅力と、それを育んだ知多半島の風土を伝え、考える場」

「常滑焼を通じて、生活者と作り手が日々の営みを問い直す場」

### 【各施設の活動方針】

#### （1）資料館活動方針

- ①常滑焼とその生産活動を中心とした地域資料の収集・保管と研究
- ②資料に裏付けられた歴史と価値を伝える展示と発信
- ③市民に開かれたやきものの学びと交流の場の提供
- ④やきものを取り巻く施設や研究機関などと連携した事業の展開

#### （2）陶芸研究所・研修工房活動方針

- ①常滑焼の多様な技術を継承し、次代の陶表現を創造
- ②地域に根付く常滑焼の作り手の育成と支援による地域産業への貢献
- ③現代陶芸に生かされている常滑焼の伝統と芸術性を世界へ発信
- ④陶芸研究所の建物の魅力を伝えるための事業の展開
- ⑤使い手と作り手が集う場をつくり、常滑焼を通じた暮らしの提案

既存の定義（【参考資料3】参照（12ページ））を踏まえつつ、上記のコンセプト（基本理念）と活動方針を定めて、資料館の展示リニューアル内容に反映していきます。

## 第4章 展示リニューアルコンセプト

中世（平安時代末期）から現代まで続くやきものの町である常滑は、常滑焼の産地として日本の六古窯の一つに数えられています。中世から近世（江戸時代）に至るまで、甕や壺などの大型のやきものをつくり、それらを全国に先駆けて流通させる最先端のやきものの産地でした。また、江戸時代後期に関西を中心に煎茶文化が流行すると、高い技術を必要とする急須がつくられ、常滑の名工時代が始まります。近代は西洋教育を受けた作り手による芸術的な陶彫（陶による彫塑）や土管、テラコッタ、衛生陶器、タイルなど都市を支えた常滑を代表する建築陶器が作られるようになります。これら常滑のやきもの文化は地域の風土や人々の暮らしを支えながら今も息づいています。

資料館の常設展示では「国指定重要有形民俗文化財」に指定されている明治から昭和初期にかけての常滑のやきものを作る生産工程から実際に暮らしの中で使われたやきものまで展示しています。

しかしながら、資料館が開館して約40年が経過し、当時の流通や暮らしなどの時代背景が現在の状況と合わないことなどから、来館者から見れば馴染みの薄いやきものが展示されている印象が強く、展示を見ても伝わりづらい現状があります。

そこで、次のとおり【展示リニューアルコンセプト】を定めました。

### 【展示リニューアルコンセプト】

## 「暮らしの中で生きる常滑焼」

### （1）—中世から続く常滑焼の歴史を、当時の流通や暮らしから知る—

モノだけでなく、常滑焼がどういった経緯で全国に先駆けて広がっていき、使われていたかを、歴史を軸に、当時の流通（人、船、鉄道など）や暮らし（生産地と消費地）を古文書や絵画などの史料から紐解き、デジタルデータなどを活用して伝えます。

### （2）—常滑の風土の中で育まれたやきものの技術や文化を未来へつなぐ—

中世から続く常滑焼の技術や文化は、備前焼や越前焼などの他の日本六古窯産地に限らず全国各地に伝わっています。各産地で常滑焼の影響を受けた技術や、現地に行かなければ見ることができないモノを作品や写真などを用いて紹介し、常滑の風土の中で育まれたやきものの技術の高さと、その背景にある文化を次の世代に伝えるための展示をします。

### （3）—市民や訪問者（観光客や研究者など）に学びと交流の機会をつくる—

日本六古窯が「日本遺産」に認定され、常滑焼の技術や魅力が改めて注目されています。そこで、市民とともに、やきものの仕事に携わる人、常滑焼を学びたい人、常滑焼の魅力を知りたい・伝えたい人に“常滑焼の価値を伝える”学びと交流の機会をつくります。

また、日々の暮らしにはやきものが身近にあり、それがどのように作られ、使われていたかを学び、昔の暮らしを知ることで、これからの暮らしを見つめ直す“キッカケ”とします。



## 第5章 展示リニューアル計画

前章で記述した【展示リニューアルコンセプト】を踏まえながら、平成30（2018）年度に展示リニューアル基本設計（計画）を行います。

展示基本設計は、事業提案型入札（プロポーザル方式）で共に業務を進める専門業者を選定するとともに、展示リニューアルの機運を高めていくためにも市民と共に考える方法を検討します。なお、基本設計の検討項目は次のとおりです。

### 【展示リニューアル基本設計における検討項目】

#### [ハード面]

##### （1）展示計画

- ①展示テーマ・展示構成
- ②展示配置、ゾーニング・動線計画
- ③展示手法
- ④展示整備イメージ

##### （2）施設・設備改修計画への条件整理

- ①展示計画を優先した施設・設備改修の方向性
- ②展示物の保全環境に配慮した施設・設備
- ③指定文化財の資料を想定した展示及び保存するエリアの設定
- ④施設・設備改修の範囲

・想定される施設・設備改修

施設改修：耐震補強<sup>※2</sup>、外装タイル貼直、館内C B壁改修<sup>※3</sup>

※2 平成26（2014）年度実施の耐震診断の結果（南北・東西方向、1・2階）4計測中1箇所  
所でIs値が0.6未満の値（0.578）があり、耐震補強が必要

※3 館内C B壁は、常設展示室及び階段の側面にあり、大地震時に崩落の危険があるとの耐震診断業者から指摘があり、除去処置など必要

設備改修：電気設備、空調設備、照明設備

#### [ソフト面]

##### （1）市民と共に考える方法

- ①市民と共に創り上げる項目・手段の検討
- ②実施スケジュールの設定
- ③上記の実施
- ④展示計画への反映

## (2) 事業推進計画への協力・補助（リニューアル・オープンまでに取組むこと）

次の項目を実現するための手法の検討と提案

### ①市内小学生学習事業（実施：平成30年度～）

現在、市内小学校の資料館への定期的（1回/年）な来館は全9校のうち、1校のみです。そこで、市教育委員会と協力し、近隣施設（INAX ライブミュージアム）と連携することで、市内小学校が定期的に来館し、常滑焼について学ぶ機会をつくります。また平成30（2018）年度から実施することで、小学生や教師の反応を展示計画に反映していきます。

### ②親子学びプログラム

夏季休暇などを利用した子ども向け、または親子で学べる様々なプログラムを構築します。学ぶ場を提供し、何度も資料館へ来館する仕掛けをつくります。

### ③他施設連携事業

資料館と陶芸研究所・研修工房を含めた「とこなめ陶の森」だけでは、展示スペース、立地条件などの理由で常滑焼に関連するすべての展示ができません。そこで、市内外のやきものを取り巻く施設などと連携し、展示するものの分担を進めるとともに、来館者が周遊できるようなネットワークの体制と仕掛けづくりを進めます。

## 【展示リニューアルエリア】

上記で検討する展示計画のエリアは次のとおりです。

- |             |                                      |                         |
|-------------|--------------------------------------|-------------------------|
| (1) 資料館 1 F | 玄関、エントランスホール、コンコース、展示ホール、特別展示室、常設展示室 |                         |
| (2) 資料館 2 F | 階段、ギャラリー（一部分）                        |                         |
| (3) その他     | 屋外ギャラリー                              | 合計 約 650 m <sup>2</sup> |

※詳細は、【参考資料4】参照（13 ページ）

## 第6章 事業費の概算

展示リニューアルの計画的・安定的な運営を図るため、表1（展示リニューアル全体の概算事業費）のとおり試算しました。なお、あくまで概算費用のため、基本設計及び実施・改修設計時に費用が変動します。

また、事業費の原資は、「常滑市陶業陶芸振興事業基金」※4から捻出します。

※4 常滑市名誉市民の故伊奈長三郎氏から陶業陶芸振興を目的に寄贈された自社株式の配当金を基金とするもの（昭和47（1972）年設立）

表1・展示リニューアル全体の概算事業費

項目		金額（千円）	実施年度
展示	基本設計（施設・設備含む）	120,000	平成30（2018）
	実施設計		平成31（2019）
	展示工事及び製作等業務		平成32（2020）
	施工監理		平成32（2020）
施設	改修設計	90,000	平成31（2019）
	改修工事（耐震補強、外装タイル貼直、館内C B改修等）		平成32（2020）
	施工監理		平成32（2020）
設備	改修設計	40,000	平成31（2019）
	改修工事（電気設備、空調設備、照明設備等）		平成32（2020）
	施工監理		平成32（2020）
合計		250,000	

## 第7章 スケジュール

展示リニューアルのスケジュールは、【参考資料5】参照（14ページ）に示すとおり各年度に計画された内容に従い、平成32（2020）年度には、展示リニューアル（展示及び施設・設備）工事を実施するため、一時休館とします。そして、工事終了後となる平成33（2021）年度に、資料館開館40周年としてリニューアル・オープンする予定です。

なお、展示基本設計は、展示及び施設・設備を含め全体の計画を示します。また展示基本設計の業者選定方法は、プロポーザル方式を採用し、展示実施設計は展示基本設計で選定された業者と随意契約を予定しています。展示工事業者の選定方法は未定です。展示基本設計と展示実施設計を年度で分けた理由は、同時に施設・設備改修工事も実施するので、展示基本設計の結果を、施設・設備改修の工法などに反映させるためです。

## 第8章 運営体制

資料館の役割（資料収集・保存整理・調査研究・展示）は、市場原理だけでは律することができなく、常滑焼の魅力や価値を伝えていくには恒常的な運営が求められます。そのため、市が長期的な視点で直営にて運営していくことを基本とします。

また、展示リニューアル後の資料館が、魅力ある運営を継続していくためには、本構想を理解したうえで、さまざまな分野における卓越した知見や独創的なアイデアなどをもとに企画・実行していく必要があります。そこで、この展示リニューアル後に資料館の運営に対する助言・指導を行う組織を新設し、リニューアル・オープン時の高いクオリティを保つためのノウハウなど継承していく方法を検討します。

## 第9章 評価方法

魅力ある運営を継続していくには実施内容をたえず評価・検証し、改善していくことが大切です。評価指標は、資料館活動方針を軸に定量的指標と定性的指標で判断し、毎年度で各活動方針の項目において目標値を定め、評価を行い、検証することで目標値・実施内容に適時改善を図ります。

なお、各活動方針の項目における定量的指標と定性的指標の設定及び具体的な手法は、平成30（2018）年度の展示基本設計時に検討していきます。

### 【評価指標】

資料館活動方針の4項目に対して毎年度で目標を定め、定量的指標と定性的指標の達成度により評価します。

[参考]

- ①常滑焼とその生産活動を中心とした地域資料の収集・保管と研究
- ②資料に裏付けられた歴史と価値を伝える展示と発信
- ③市民に開かれたやきものの学びと交流の場の提供
- ④やきものを取り巻く施設や研究機関などと連携した事業の展開

## 参考資料

### 【参考資料1】

・とこなめ陶の森資料館施設概要

所在地 常滑市瀬木町4丁目203番地  
 構造 鉄筋コンクリート造2階建  
 建築面積 1596.1 m<sup>2</sup> 延床面積 (1階 1079.2 m<sup>2</sup>、2階 516.9 m<sup>2</sup>)  
 開館年 昭和56(1981)年

### 【参考資料2】

・とこなめ陶の森展示リニューアル検討会委員名簿 (平成28(2016)・29(2017)年度)

	氏名	所属	職名	リニューアル・立ち上げに関わった博物館・資料館
1	可児 光生	美濃加茂市民ミュージアム	館長	美濃加茂市民ミュージアム
2	鞍田 崇	明治大学大学院理工学研究科	専任准教授	日本民藝館ワークショップ
3	大長 智広	京都国立近代美術館	学芸員	愛知県陶磁美術館常設展示
4	藤澤 良祐	愛知学院大学文学歴史学科	教授	瀬戸市歴史民俗資料館・瀬戸蔵
5	増山 禎之	田原市博物館	副館長	田原市博物館・吉胡貝塚資料館
6	伊奈 啓一郎	常滑市陶業陶芸振興事業運営委員会	会長	—

### 同オブザーバー名簿 (平成29(2017)年度)

	氏名	所属	職名
7	澤田 忠明	常滑市環境経済部	部長
8	高橋 孝治	常滑市陶業陶芸振興事業運営委員会	コーディネーター(デザイナー)

※常滑市陶業陶芸振興事業運営委員会 会長が出席を認めた者

### 同事務局名簿 (平成29(2017)年度)

	氏名	所属	職名
9	杉下 直樹	常滑市とこなめ陶の森	館長
10	加藤 和成	常滑市とこなめ陶の森	副主幹
11	竹内 稔将	常滑市とこなめ陶の森	主任
12	小栗 康寛	常滑市とこなめ陶の森	主事(学芸員)

### 【参考資料3】

—陶芸研究所の開館時の役割（昭和36（1961）年10月）＜開館時の関係資料を参考に記述＞—

- （1） 古常滑に代表される中世以来の伝統と芸術性が現代陶芸に裏打ちされていることを広く社会に発信するための作品展示
- （2） 技術吏員による陶芸作品の制作及び販売
- （3） 研修生を受け入れ、技術指導を行う

—資料館の開館時（昭和56（1981）年4月）に定められた施設の目的—

地域と密接に関連し市民が積極的に利用する“開かれた施設”であるために次のような性格を持つ。

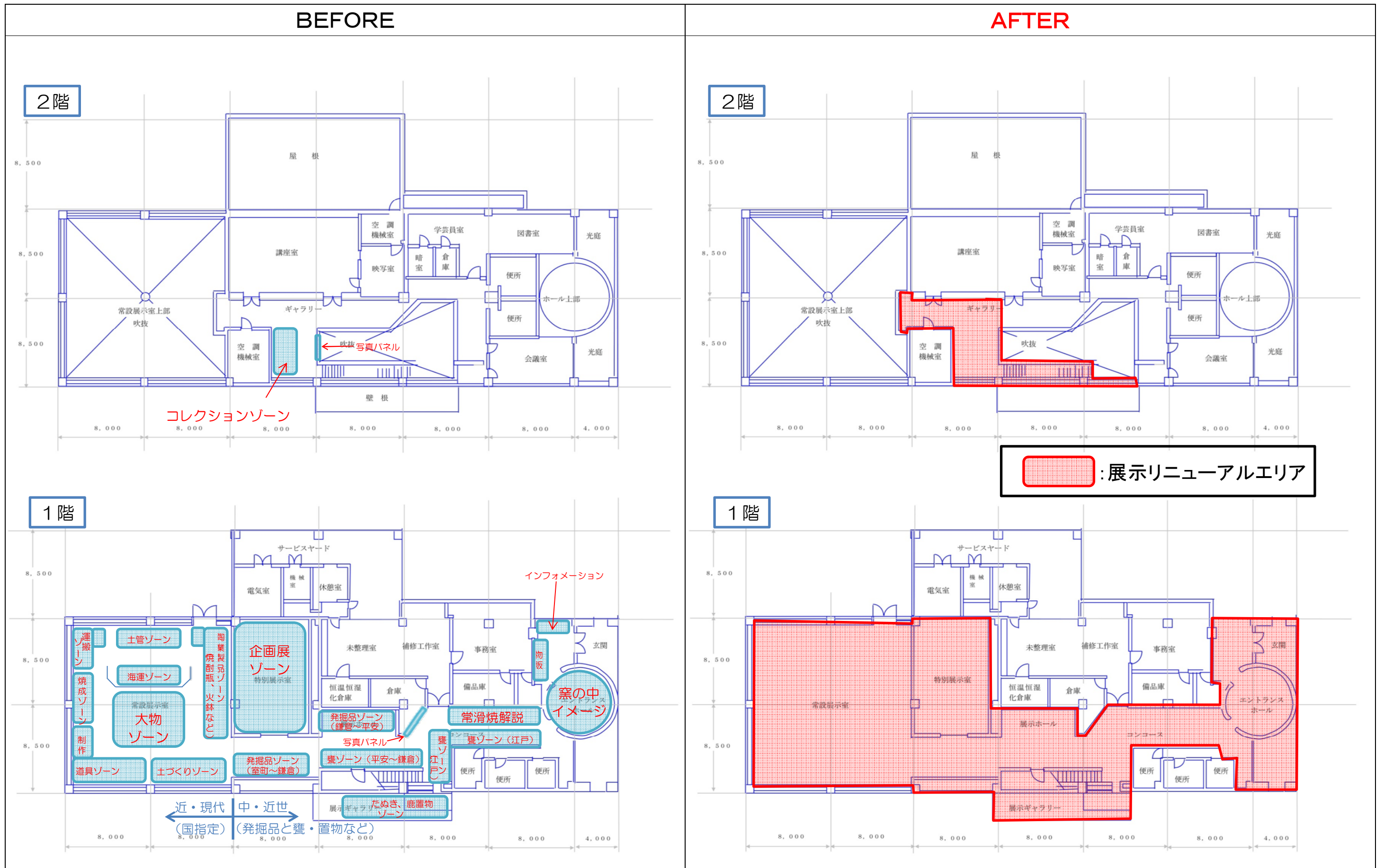
- （1） 窯業民俗資料を中心とした市内の文化財を守り、活用するための「文化財センター」
- （2） 博物館としての機能を持つ「社会教育施設」
- （3） 学校教育における「郷土学習の場」
- （4） 地域産業の振興に寄与する
- （5） 知多半島の歴史・民俗を明らかにする

—とこなめ陶の森設立時（平成24（2012）年4月）の施設の定義—

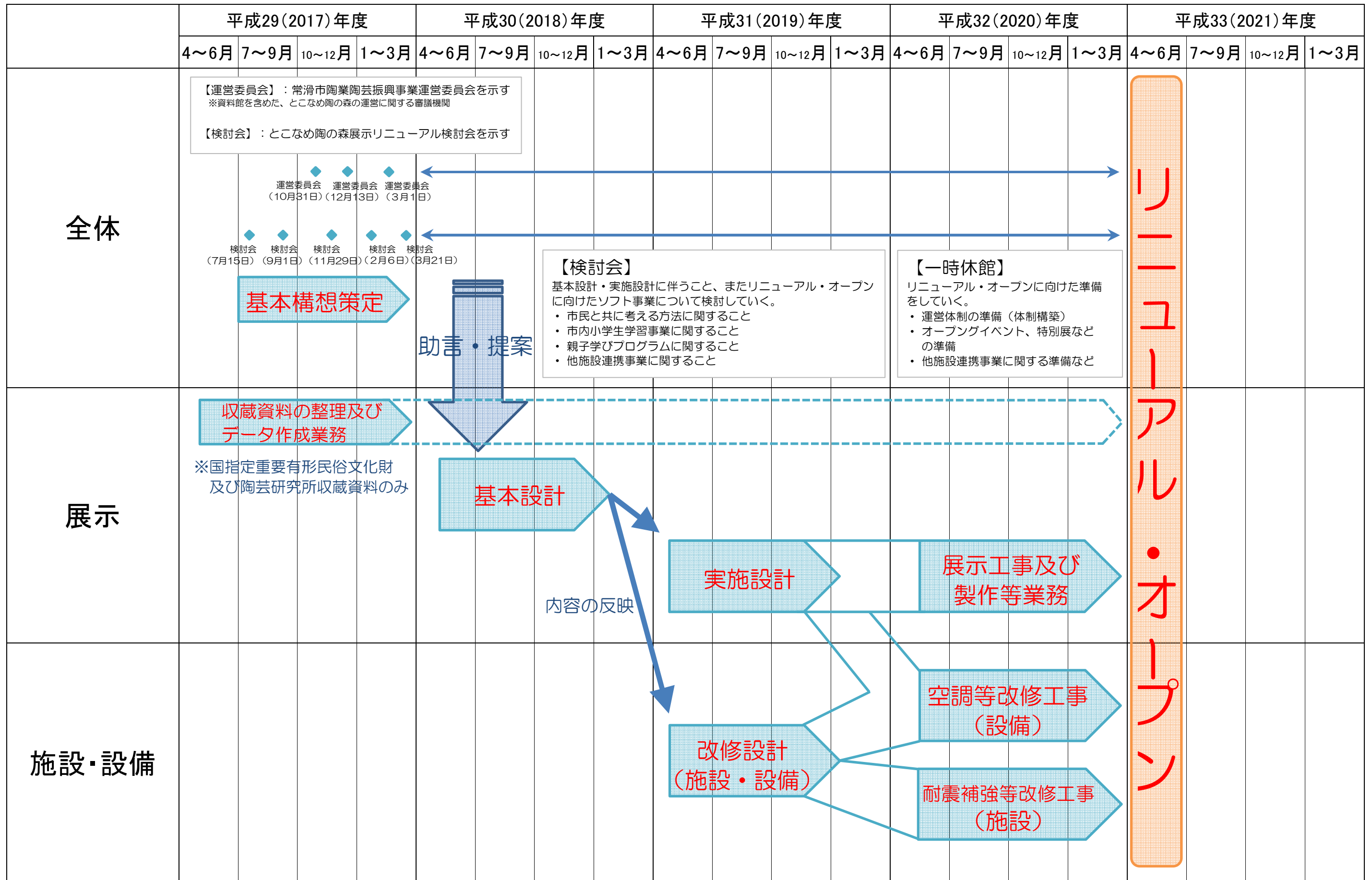
“常滑焼の振興と伝承”及び“やきもの文化の創造と発信”を目的とした多様な機能※<sup>5</sup>を備えた複合施設である。

※5 調査研究、資料収蔵、展示、作品販売、人材育成、会議室・窯等機器貸出を示す

【参考資料4】とこなめ陶の森資料館 展示リニューアルエリア



【参考資料5】とこなめ陶の森資料館 展示リニューアルスケジュール



リニューアル・オープン